様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１２９３４

研究課題名（和文）明治・大正期の覚王山日暹寺に関する史的研究

研究課題名（英文）The historical research on the Kakuozan Nissen-ji Temple in the Meiji and Taisho period

研究代表者
佐野　方郁（SANO, Masafumi）

大阪大学・日本語日本文化教育センター・准教授

研究者番号：１０４０３２０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：イギリス人のウィリアム・ペッペが1898年にインドで釈迦の遺骨を発見し、イギリス政府・インド政庁が1899年にタイ王室に寄贈すると、日本の仏教界は1900年にその一部を譲り受けた。覚王山日暹寺はそれを安置するために、1904 年に愛知県愛知郡田代村（現在の名古屋市千種区法王町）に建てられた寺院である（1942年に日泰寺に名称変更）。仏骨を納めるための奉安塔は1918年に完成した。しかし、日暹寺／日泰寺は日タイ文化交流の中心地の1つであるにも拘わらず、これまで研究者はほとんど注目して来なかった。本研究は、地方・宗教新聞や各宗派機関誌を分析することで、明治・大正期の日暹寺の歴史の再検討を行った。

研究成果の概要（英文）：In 1898, William Peppe discovered remains of the Buddha in British India. The following year, in 1899, the British government and its chartered administration in India gifted them to the royal family of Thailand. The Buddhist community in Japan received a part of them in 1900. The Kakuozan Nissen-ji Temple was constructed to enshrine them in 1904 in Tsukimizaka, Tashiro village, Aichi District (present-day Hoo-cho, Chikusa Ward, Nagoya City)(The name of the temple was altered to Nittai-ji in 1942). Later, in 1918, the Enshrinement Tower was constructed at Nissen-ji and this became the prescribed final shrine for the remains of the Buddha. Although Nissen-ji / Nittai-ji has come to be positioned as one of the main centers of Japanese-Thai cultural exchange, researchers, so far, have not adequately focused on its history. In this research, we review the history of Nissen-ji in the Meiji and Taisho period, analyzing regional and religious newspapers and sects' institutional journals.

研究分野：日本近現代史

キーワード：日暹寺（日泰寺）　都市史　国際交流史

１．研究開始当初の背景

（1）イギリス人のウィリアム・ペッペが 1898 年 1 月に英領インドの遺跡で釈迦の遺骨を発見すると、イギリス政府・インド政庁は 1899 年にそれをタイ王室に寄贈した。日本の仏教界の 33 宗派は、稲垣満次郎駐タイ日本公使の発案で、1900 年 6 月に大谷光演、藤島了穏、前田誠節、日置黙仙からなる奉迎使を派遣し、チュラーロンコーン国王（ラーマ 5 世）からその一部を授与された。各宗派を巻き込んだ京都との激しい仏骨の最終奉安地争いを制したのは、名古屋であった。仏骨は 1902 年 11 月に京都から名古屋に奉遷された。そして、覚王山日暹寺が 23 宗派の協力を得て、超宗派寺院として、1903 年 10 月に創建され、1904 年 11 月に愛知郡田代村月見坂（現在の名古屋市千種区法王町）に建設されるに至ったのである。日暹寺はその後、1918 年 6 月に奉安塔を建設し、そこを仏骨の最終奉安場所に定めていった。また、タイの国名が 1939 年に「シャム」から「タイ」に変更されたのに伴い、その名前は 1942 年に日泰寺に変更された。

日暹寺／日泰寺は、こうした歴史を持つだけに、タイ王室との関係も深く、プラチャーティポック国王（ラーマ 7 世）とプミポン国王（ラーマ 9 世）が 1931 年と 1963 年に訪問しただけでなく、チュラーロンコーン国王像も 1987 年に建てられた。日泰寺は今日においても日タイ文化交流の中心地の 1 つとして位置づけられている。

（2）日暹寺／日泰寺の歴史は、これまで仏教関係者や新聞記者によってまとめられる傾向にあった。例えば、寺沢玄宗氏は奉安塔の建設に至るまでの日暹寺の歴史を、日泰寺の協力を得て、1981 年に出版した。さらに加藤龍明氏も 2000 年に一般向けの読み物風の通史を発表した。

（3）その他にも、申請者が本研究を申請する前後から、川口高風氏は、仏骨事業に関わった各宗派の機関誌や名古屋の有力紙である『新愛知』の奉迎事業の記事の復刻を精力的に続けている。

２．研究の目的

本研究は、日タイ文化交流にとって重要な場所であるにもかかわらず、これまで研究者からそれほど注目されて来なかった日暹寺／日泰寺の歴史について、明治・大正期を中心に再検討することを目的とする。

３．研究の方法

本研究は、明治・大正期の日暹寺の歴史を再検討する際に、『新愛知』に加えて、もう一つの名古屋の有力紙である『中京新報』（1906 年からは『名古屋新聞』）や、京都の宗教紙である『教学報知』（1902 年からは『中外日報』）だけでなく、仏骨奉迎・奉安事業に関与した各宗派の宗報を利用した。

本研究でこれらの地方新聞・宗教新聞・各宗派宗報を重視するのは、日暹寺／日泰寺の歴史に関するそれ以外の資料はあまり残っていないと考えているからである。例えば、寺沢氏や加藤氏のうち、特に寺沢氏の文献は日泰寺の資料を使用しているものの、それを見る限りでは、日泰寺は自らの歴史に関する資料をそれほど保有していないようである。また、日本の公共機関についても、直接的な資料は、外務省外交史料館所蔵資料や鶴舞中央図書館名古屋市史編纂資料の中に部分的に残っているだけである。寺沢氏や加藤氏はその他にも、葦名信光や小室重弘といった、当時の仏教関係者や新聞記者等が残した刊行物を多用する傾向にある。しかし、これらの刊行物は、英領インドでの仏骨発見から京都奉迎までの状況や名古屋奉遷の決定過程を知る上では貴重な資料となるものの、日暹寺の歴史を全体的に知るための資料としては限界がある（ちなみに、葦名や小室の他にも、岩本千綱・大三輪延弥や野原稲造が同様の刊行物を発表した）。

本研究は、地方新聞・宗教新聞・各宗派宗報の記事を比較検討することで、史料批判を加えながら、明治・大正期の日暹寺の歴史の再検討を行った。

４．研究成果

（1）本研究は、研究代表者である佐野方郁が学術論文「「明治期の仏骨奉迎・奉安事業と覚王山日暹寺の創建―各宗派機関誌と地方・宗教新聞の分析を中心に―」を発表することを通じて、日本の仏教界が 1900 年 6 月にチュラーロンコーン国王から仏骨の一部を授与されてから、1904 年 11 月に覚王山日暹寺が愛知郡田代村月見坂に建設されるまでの歴史の再検討を行った。この論文を通じて明らかになったことは、次の点である。

・当該論文は第一に、日本の仏教界が 1900 年 6 月に仏骨を授与された際に、その主導権を握っていた、浄土真宗大谷派の動向について明らかにした。大谷派が石川瞬台参務を中心に、仏骨の奉迎・奉安事業の主導権の確保に動いたのは、各宗派に号令できる立場を獲得することを目指していたからであった。大谷派は、最初は単独で奉迎使を派遣して、仏骨事業を独占しようと考えた。さらに、日本の仏教界の大勢が大谷派単独ではなく、協力して奉迎使を派遣することを望んでいることが明らかになると、大谷派は自派からは新門主の大谷光演を出し、奉迎正使を確保することで、事業の主導権を握ることに成功した。

・当該論文は第二に、仏骨が 1900 年 7 月に

京都市下京区の妙法院に奉迎・仮奉安された後、実際に事業を担当した日本大菩提会の活動について明らかにした。菩提会の中心になったのは、会長の村田寂順と副会長の前田誠節であった。しかし、菩提会は仏骨の奉安所である覚王殿を建設するための寄付をほとんど集めることができず、負債を増加させていった。また、大谷派も、菩提会の活動として、北清事変やインドの飢饉に対する恤兵・救済事業を優先すべきであるとする自らの提案が退けられる中で、自派の財政状況が悪化したことも重なって、1901 年 2 月頃から仏骨事業に積極的に関与しなくなっていった。菩提会は結局打開策を見出すことができず、京都における奉安事業は停滞していった。

・当該論文は第三に、名古屋側が京都との激しい仏骨の最終奉安地争いを制し、仏骨が 1902 年 11 月に京都から名古屋に奉遷される過程について、再検討を行った。例えば、特に加藤氏の文献は、名古屋側が覚王殿の建設費や菩提会の負債の返済費を支払うための多額の寄付を約束したり、広大な土地を用意したりすることで、ワチラーウット皇太子（後のラーマ 6 世）の来日を控えて危機感を抱く日本仏教界の支持を取り付けていったことを詳しく論じている。それに対して、当該論文は京都側の対応についても新たに検討した。例えば、京都側が結成した平安同志会は、有力者が参加しておらず、彼らが提示した覚王殿の建設地や寄付の予定額も十分であるとはいえない状態であった。その上、妙心寺の寺班金や神楽岡の寄付地に関する疑惑が浮上する等、京都を支持する前田誠節の悪評も絶えなかった。そうした中で、1902 年 10 月に最終投票を行った結果、名古屋が仏骨の最終奉安地に決定したのである。

・当該論文は第四に、これまではほとんど検討されていなかった、仏骨が名古屋に奉遷されてから、覚王山日暹寺が 1904 年 11 月に建設されるまでの歴史を検討した。仏骨が 1902 年 11 月に奉遷･仮奉安されたのは、名古屋市裏門前町（現在の名古屋市中区裏門前町）の万松寺であった。しかし、寄付は名古屋でも十分に集まらず、名古屋側の見通しがあまりにも甘かったことが発覚した。また、名古屋側は菩提会の負債額の妥当性に疑問を持ち、返済費の支払いを先延ばしにしていった。そうした中で、菩提会は少しでも奉安事業を進展させようと、仏骨の最終奉安地を愛知郡田代村月見坂に決定していった。さらに稲垣満次郎も仏骨事業が名古屋で停滞し始めている状況に強い危機感を抱き、事業の再出発を図るべきだと考えた。そして、稲垣の発案で、23 宗派の協力を得て、覚王山日暹寺が超宗派寺院として、1903 年 10 月に創建されるに至ったのである。初代住職に就任したのは、天台座主の吉田源応であった。しかし、日露戦争が 1904 年 2 月に始まったため、日暹寺は当初予定した寄付の募集を開始することができなかった。また、奉迎副使や菩提会の副会長を務めた前田が 9 月に起訴されたため、菩提会の評価は失墜した。そうした中で、日暹寺は結局名古屋の有力者等の寄付で、11 月に月見坂に仮本堂や庫裡を建設し、万松寺から仏骨を奉遷させた。日本における仏骨奉安事業は、日暹寺が建設された月見坂の地で、再出発を果たしていくことになるのである。

（2）本研究は、学術論文等を発表するまでには至らなかったものの、地方新聞・宗教新聞・各宗派宗報の閲覧を通じて、1904 年 11 月に覚王山日暹寺が建設されてから、1918 年 6 月に奉安塔が建てられるまでの歴史の再検討を行った。その結果、次の点が新たに明らかになりつつある。

・日暹寺が 1904 年 11 月に建設されたとき、天台宗真盛派貫首の石山覚湛が 2 代目の住職を務めていた。日暹寺は、前田の起訴で評判を失墜させた菩提会との関係を断絶していった。

・日暹寺が発展し始めたのは、奉迎使や菩提会の副会長を務めた可睡斎主の日置黙仙が 1907 年に 3 代目の住職に就任してからであった。日暹寺は、可睡斎から応援に駆けつけた雲水たちが常駐・修行できるよう、1909 年に僧堂を設置したのを手始めに、書院・奥書院・位牌堂等を建設し、寺の維持・管理・運営に努めていった。また、信徒の要望に応えて、1909 年に四国八十八箇所巡り、新愛知新聞社の発企で、1914 年 10 月に親子地蔵を設置すると共に、信徒自らも桃花や桜花を植える等、境内を整備していった。そうした中で、1911 年 8 月に名古屋電気鉄道覚王山線が開通したことも相まって、日暹寺は超宗派寺院としてだけでなく、名古屋地域の数少ない遊覧地の一つとして、住民の間に浸透していったのである。それに伴い、日暹寺の周辺地区も別荘地として発展していくことになった。しかし、こうした日暹寺の発展の仕方については、禅宗の要素が強すぎるとか、「低級の信者」に迎合しすぎているとの批判もあった。

・日暹寺は仏骨を納める奉安塔の建設に努力していった。日暹寺は日暹会を設立し、会員から建設費を集めようとしたものの、うまく行かなかった。そうした中で、日置は各宗派の本山だけでなく、東京等の有力者にも寄付を呼びかけ、建設費を工面していった。また、伊東忠太東京帝

国大学教授は旧知の日置から依頼を受け、ガンダーラ様式の奉安塔を設計した。日暹寺は 1914 年 2 月に奉安塔の地鎮祭、1915 年 5 月に起工式を行った。日置は 1916 年 5 月に永平寺貫首に当選したため、曼殊院門跡で日暹寺副住職の中村勝契が 4 代目の住職に就任した。奉安塔が 1918 年 6 月に完成すると、仏骨は奉安塔に奉遷された。日暹寺はその他にも、日置が住職を務めていた時代から、正式な本堂の建設を計画しており、1918 年 11 月に地鎮祭を行った。しかし、日暹寺は費用等の問題があったせいか、この段階では、正式な本堂を建設するには至らなかった。

・タイ王室は、日暹寺が建設されてから奉安塔が完成するまでの期間も引き続き、日本における仏骨の奉安事業を見守り続けていった。チュラーロンコーン国王は奉安塔の完成を見届けることなく、1910 年 10 月に死去したものの、国王が日暹寺の建物をつくるために贈呈した、2 本のチーク材は 12 月に到着した。また、日置は 1911 年 12 月に日本の仏教界を代表して、ワチラーウット国王の戴冠式に参列した際に、複数の大臣から奉安塔の建設の状況について質問を受けた。さらにワチラーウット国王が日本の仏教界の各宗派に答礼品を送ってきたのに対して、日暹寺は 1913 年 1 月に紀念品頒与式を行った。それ以外にも、タイ王族が来日した際には日暹寺を訪問し、奉安事業の進捗状況を視察した。

なお、本研究においては、大正期に新聞の紙面が増加する中で、その閲覧に予想以上に時間がかかってしまったこともあり、覚王山日泰寺の資料調査を行うことができなかった。今後は、もし許可が得られるのであれば、日泰寺の資料調査を行い、地方新聞・宗教新聞・各宗派宗報を閲覧することで得られた今回の成果と合わせて分析することで、日暹寺が建設されてから奉安塔が建てられるまでの歴史について、学術論文等を発表していくことにしたい。

〈引用文献〉

①加藤龍明『微笑みの白塔』（中日新聞社、2000 年）
②寺沢玄宗『釈尊御遺形伝来史―覚王山日泰寺奉安塔の由来』（覚王山日泰寺、1981 年）

③川口高風「「覚王山ノ創建」について」、『愛知学院大学教養部紀要』第 49 巻第 1 号（2001 年）
④同「日置黙仙と忽滑谷快天よりみた仏骨奉迎」、同、第 61 巻第 1 号（2013 年）
⑤同「「前田奉迎使渡航日記」について」、同、第 61 巻第 2 号（2013 年）
⑥同「曹洞宗の「宗報」における仏骨奉迎の記事について」、同、第 62 巻第 1・2 号（2014 年）
⑦同「「禅宗」における仏骨奉迎の記事について」上下、同、第 62 巻第 4 号、第 63 巻第 1 号（2015 年）
⑧同「真宗大谷派の機関誌における仏骨奉迎の記事について」、同、第 63 巻第 2 号（2016 年）
⑨同「「教海一瀾」における仏骨奉迎の記事について」、同、第 63 巻第 3 号（2016 年）
⑩同「各宗の機関誌における仏骨奉迎の記事について―天台宗・真言宗（古義、新義）・浄土宗・日蓮宗」、同、第 64 巻第 1 号（2016 年）
⑪同「「新愛知」における仏骨奉迎の記事について」、同上、第 64 巻第 2 号（2017 年）
⑫同「「正法輪」における仏骨奉迎の記事について」上下、同、第 64 巻第 3 号、第 65 巻第 1 号（2017 年）

⑬葦名信光『釈尊御遺形奉迎紀要』（日本大菩提会、1902 年）
⑭岩本千綱・大三輪延弥『仏骨奉迎始末』（1900 年）
⑮小室重弘『釈尊御遺形伝来史』（岡部豊吉、1903 年）
⑯野原稲蔵『釈尊遺形奉迎記事』（伊東長十郎、1901 年）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

・佐野方郁「明治期の仏骨奉迎・奉安事業と覚王山日暹寺の創建―各宗派機関誌と地方・宗教新聞の分析を中心に―」、『日本語・日本文化』第 45 号（2018 年）、1-44 頁。
doi/10.18910/68127

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕
なし

６．研究組織

（1）研究代表者

佐野 方郁（SANO, Masafumi）
大阪大学・
日本語日本文化教育センター・准教授
研究者番号：10403205